調査報告

社会的危機とシャーマニズム

――東日本大震災後の八戸総合観光プラザでのイタコの口寄せ体験事業から――

塩　月　亮　子

Social Crisis and Shamanism: Through the business of *Itako's Kuchiyose* experience in the Hachinohe Synthetic Tourist Plaza after the East Japan Great Earthquake

Ryoko SHIOTSUKI

はじめに

ここ数年、「駅でイタコに会える」「八戸駅で「イタコの口寄せ」が人気」などの記事[1]が目につくようになった。これらは、青森県の八戸駅東口２階のはちのへ総合観光プラザで実施されている「イタコの口寄せ」事業の情報であり、今やイタコの自宅や恐山での夏や秋の大祭[2]のときに開かれるイタコ市に出かけなくとも、新幹線の発着駅にある観光プラザで手軽にイタコに会える企画があることを示すものであった。筆者はそこにこれまであまり公には実施されてこなかった「観光とシャーマニズムの接合」をみたので、2013（平成25）年９月23日、本事業を企画した公益社団法人八戸観光コンベンション協会を訪れ、その経緯や実施状況をインタビューした[3]。

本報告では、主に当協会で聞き取りしたデータをもとに、2011年３月11日に発生した東日本大震災など社会的危機が生じたときには心のケアとしてのシャーマニズムが必要とされ、それが「観光」という形で実現されている場合もあることを明らかにする。さらに、本事業にみられる問題点や改善点にも触れ、今後の課題についても考えていきたい。

１．イタコとは

イタコとは、東北地方で活躍する巫者、いわゆるシャーマン（トランスなど非日常的意識状態となり神や精霊など超自然的存在と直接交流し、その過程で予言や託宣、病気治療等をおこなう人）であり[4]、従来は目の不自由な女性がなる職業のひとつとされた[5]。本人はイタコになりたくなくとも、家族や親族がそう決めれば少女のうちからイタコの師匠に預けられ、家事手伝いをしながら師匠から経文やお祓い、儀礼のやりかたなどを教わった。従って、イタコは修行型シャーマンに分類される。

柳田国男は「巫女考」のなかで、口寄せの巫女をイタコと称し、それは盲目の女性で、モリコやオカミサマともいうと述べている[6]。「口寄せ」とは死者や祖霊を呼び寄せて自らに憑依させ、依頼者にその思いや気をつけるべきことなどを語る行為を指す。それゆえ、イタコは憑依型シャーマンでもある。

依頼者たちはイタコの言葉を死者や祖霊の言葉として真摯に受け止め、今後は前向きに生きるよう元気付けられる。これは一種のカウンセリングによる癒しと捉えられる。戦争や飢饉など社会の危機的状況においては、シャーマニズムの伝統がある社会では、シャーマンを頼る傾向が顕著にみられる。現在も危機的状況が生ずるとイタコは必要とされるが、イタコの数は急激に減少している。この点に関しては、後で詳述する。

上記のようなイタコの特徴を踏まえ、次に、八戸駅の総合観光プラザで実際におこなわれている「イタコの口寄せ体験」の事業内容についてみていくことにする。

２.「イタコの口寄せ体験」事業内容

２－１．契機

当事業の企画者のひとりである公益社団法人八戸観光コンベンション協会のＯ・Ｋさん（女性）によれば、この事業が企画された契機・経緯は以下の通りという。

1998（平成10）年および1999（平成11）年に東京ドームでねぶた祭りなど郷土の文化を紹介する「活彩あおもり大祭典」が開催された。その際、青森県内のイタコ20名ほどで「口寄せコーナー」を設置したところ、行列ができ大盛況だった。

それまでも八戸市役所や八戸観光コンベンション協会には、（大祭の時期以外にはイタコが恐山にいないので）「恐山に行ってもイタコに会えなかったから、誰かを紹介して欲しい」という問い合わせが多数寄せられていた。

また、かつてはホテル内で旅行者に夜、イタコの口寄せをおこなったことがあった。しかし、１度に５人くらいしかみられず、大変で継続しなかった。

東京で「活彩あおもり大祭典」が開催された当時、八戸市内にはイタコが３人いた。ひとりは全盲で南郷区在住のＮ・Ｔさん、もうひとりは弱視で八戸市二条在住のＯ・Ｍさんで共に70歳代、もう一人は目の見える40代のＭ・Ｈさんだった。この３人に対し八戸観光コンベンション協会は、2010（平成22）年には新幹線が八戸を通るようになるので、駅ビル２階のはちのへ総合観光プラザを利用し、「口寄せ」を依頼者におこなってほしいと協力を求めた。

最初、彼女たちはみな協力を断った。それでもあきらめずに市役所の観光課職員の女性と共に私（八戸観光コンベンション協会のＯ・Ｋさん）は毎日のようにイタコの家々を訪れては仕事を手伝ったりおしゃべりをしたりして仲良くなっていった。そして最後はようやく引き受けてくれた。

ちなみに、イタコの口寄せを活用することで、八戸をただの通過駅とせずに降りて観光してもらうことに繋がる本企画は、市役所の観光課からも賛同を得たという。

２－２．事業の開始とその後

イタコの了承を得た後、私（Ｏ・Ｋさん）たちは総合観光プラザに６畳分の畳を敷き、壁には暗幕をはり、託宣の部屋を演出した。普通、イタコの自宅には祭壇があるのだが、それは作らなかった。しかし、イタコは観光プラザで口寄せする前後には、家の祭壇で拝む。

イタコはこの観光プラザに数珠とオダイジといわれるお守り（師匠から一人前のイタコの印としてもらったもの）だけを持ってくる。最初は八戸の祭りの時期に合わせた期間限定（春先～11月までの１～５日）の企画だったが、事業継続の要望が多く、ニーズに応えるべく現在も継続しておこなっている。１～５日までとしたのは、数字の１を「イ」、日を「タ」、５を「コ」というふうに語呂合わせで覚えやすくしたためである。

目の不自由なイタコもいるので、予約の日時はカセットテープに吹き込んだ。

「芸能人のものを見て欲しい」「東京に来てやってほしい」というリクエストは、すべて断っている。

私（Ｏ・Ｋさん）は暗幕の中に基本的に入らないため詳しい相談内容はわからないが、最初の予約時に簡単に内容を問合わせたり、注意事項を述べたりする。そのとき、降ろしたい霊（死者）は亡くなってから100カ日経っているか、葬式は終わっているかを必ず聞く。また、名前と住所も聞く。依頼者のなかには震災で身内を亡くしたのでお願いしたいというのもある。

宣伝に関しては、この事業はまずは地方紙で取り挙げられ、次にTV局が取材に訪れ、朝日新聞や読売新聞、タイムス社、その他雑誌などにも出るようになった。2010（平成22）年にはYahoo!トピックで紹介されたが、その反応は大きく、関西や九州からも来るようになった。

現在は、それぞれ健康状態や家庭の事情などから、イタコのなかでＯ・Ｍさんただひとりがこの事業に当たっ

ている。O・M さんは若い時分は八戸駅近辺に住んでおり、観光協会にも「O・M さんに会いたい、家はどこか」という問い合わせがしょっちゅう来ていた。

しかしながら、以前から活躍しており人気のあったO・M さんも今は入退院を繰り返している。それでもイタコたちは弟子を取らないと言っており、後継者がいない状態となっている。

２－３．これまでの実績

現在の「イタコの口寄せ」体験事業の内容は、以下の通りである（O・K さん作成の資料「イタコの口寄せ体験事業」による）。

・時間帯：10:00～15:00
・場所：はちのへ総合観光プラザ
・料金：１霊　15分程度　4,500円
・申し込み方法：完全予約制（電話のみ）
・受付人数：１日15人程度

また、これまでの依頼件数は、次の通りである。

・2009（平成21）年７月～2010（平成22）年２月までの計24日間：404件
・2010（平成22）年７月～2010（平成22）年11月までの計28日間：398件
・2011（平成23）年６月～2011（平成23）年10月までの計30日間：329件
・2012（平成24）年６月～2012（平成24）年10月までの計30日間：319件

O・K さんによれば、依頼者は口寄せ体験の前日から八戸入りして１泊する、あるいは口寄せが終了してから八戸に１泊したり、恐山などに観光に行ったりすることが多いという。これは、イタコの口寄せをおこなう場所が観光案内所であるため、観光案内も依頼者におこなえるというメリットを活用した結果である。

また、電話のみの予約制にしたため、恐山の大祭時と違い待たなくてよいので評判が良いのだという。

このような企画により、イタコの口寄せを依頼する敷居が低くなり、また依頼者の居住地域も拡大したと考えられる。以前はイタコの家を探し当てることや恐山での順番待ちが大変であった。また、値段の相場も地元のひと以外にはわかりにくいので、料金を明示している点は安心感がある。

はちのへ総合観光プラザでおこなわれるイタコの口寄せは、一霊を降ろすと4,500円支払うこととなっている。これは相場より少し高い。相場はだいたい3,000円程度で、時間も20分程度はかかるという。ただし、これはイタコの自宅に依頼者が行かないでイタコに来てもらう形なので、タクシー代が含まれると考えればそれほど高くないといえるかもしれない。また、なるべく多くのひとをみるためには、時間が制限されるのも仕方がないのかもしれない。

以上、本事業が企画・実施されるに至る経緯をインタビューから明らかにした。これらをまとめると、次のようになる。

2010（平成22）年12月、東北新幹線が全線開通（八戸～新青森）となったため、八戸駅に降りる動機付けとして青森県の文化資源であるイタコを活用し、駅直結の観光プラザでイタコの口寄せを試験的に実施し、将来的に市の観光資源として売り出せないかを八戸市役所観光課や八戸観光コンベンション協会の人々が検討した。その結果、2009（平成21）年７月から、本事業を駅の総合観光プラザで開始した。その後、恐山の大祭時やお盆中はすぐさま予約で一杯となるなど反響は大きく、各地から問い合わせがくるようになった。しかしながら、肝心のイタコが後継者不足で途絶えようとしている。

３．東日本大震災後の需要と問題点

本事業を企画・実施している八戸観光コンベンション協会のO・K さんによれば、東日本大震災後は特に宮城県からの依頼者が多くなったとのことだった。これは、社会の危機的状況下ではシャーマンが必要とされることを示して

いると考えられる。

Ｏ・Ｋさんは以前、津波で流された身内のいる遺族から口寄せ（方言）の通訳を頼まれたことがある。「水は冷たくなかったか」、「ほしいものはないか」、「お墓をどうしたいか」など、生々しい状況のやりとりがあったという。あまりにも臨場感がありすぎてとても辛く、通訳は依頼されても二度とやりたくないと語っていた。ただし、依頼者は、イタコの口寄せ体験後はすっきりした顔をしていたとのことである。

以上の事例から、イタコが地元を離れてその範囲を広げていくとき、言葉の問題があらわれてくることがわかる。これまでも、イタコの家族などが通訳をしたようだが、今後は通訳ができてカウンセリング等の知識もある者をその役に当てるなどの工夫をしなければならないだろう。

また、震災後はイタコの需要が出てきたにも関わらず、イタコの数は減少の一途を辿っていることも大きな問題である。市民のなかにはイタコは国の無形民俗文化財でもあるし、イタコの学校を作ったらどうかと言う人もいるそうだが、誰がどのように教えるのかなど、なかなか難しいとのことである。

「消えゆくイタコ」（朝日新聞　2010（平成22）年12月24日社会（14版））と題された記事によれば、かつて東北には500人以上イタコがいたが、戦後は廃業が相次ぎ、秋田、山形、福島県では途絶えたとされ、今は青森、岩手、宮城県に10数人残っているだけという。戦後の一時期までは20～30代の若いイタコも珍しくはなかったが、今や高齢化が進み、平均年齢が70歳を超えているという。また、恐山の大祭時にはかつて40人近くのイタコが参加していたが、近年は４人だけになったと報告している。

イタコの減少理由としては、厳しい修行が敬遠されることや目の不自由な人の職業選択の広がり、医療の進歩による幼少期の失明者の減少などが挙げられる。当新聞によれば、青森県におけるイタコは1980年（文化庁の調査）には84人いたのが2010年（当事者の証言や研究者の調査）には10人に減少したと伝えている。八戸観光コンベンション協会のＯ・Ｋさんによれば、イタコのＯ・Ｍさんが2012（平成24）年に恐山の大祭に出たとき、イタコは２名だけだったと彼女から聞いたという。

このような状況を改善し、本事業を継続するため、筆者は津軽のイタコなど、同じ青森県の他地域からイタコを呼び、人数を増やしてローテーションすることはどうかとＯ・Ｋさんに提案してみた。すると、八戸のイタコは「南部イタコ」とよばれ、「津軽イタコ」を呼んでくることなど、全く考えられないという返事だった。その理由は聞きそびれたが、ひとつにはこれは八戸市の事業としておこなわれているため、予算その他の問題からも、そのなかで完結させなければならないという規制があるからと考えられる。

しかしながら、青森県全体では現在、「美知の国あおもり“癒し”スポットプロモーション」[(7)]を打ち出し、「神秘のパワースポット体験」や「神秘のミステリーゾーン体験」と称して白神山地や神社仏閣、賽の河原、洞窟、岩城山や恐山などをめぐる旅を新たに提案している。青森県はひとつの県とはいえ、江戸時代には異なる２つの藩だったため、「南部のイタコ」と「津軽のイタコ」と分けがちなところもある。だが、本事業の契機を思い起こせば、東京ドームには青森県各地のイタコが結集したのだから、初心に戻り本企画を八戸市だけではなく、より大きなプロジェクトに発展させていってはどうだろうか。イタコの減少状況を考えれば、なるべく広範囲で協力し合うことが重要であろう。

おわりに

公益社団法人八戸観光コンベンション協会では、2009（平成21）年７月から八戸駅構内の観光プラザでイタコによる口寄せを実施しており、観光客をはじめとする多くの依頼者が予約を取りそこを訪れている。筆者は本催しを企画・実施している担当者にインタビューを試み、経緯や反響などを聞いた。

その結果、八戸市役所と八戸観光コンベンション協会の女性たちが地元の観光資源としてイタコのもつ癒しの力に注目し、本事業を考案・実施していることがわかった。また、東日本大震災以降、津波で流された家族・親族をもつ遺族が宮城県などから大勢訪ねてきて真剣にイタコに相談しているということもインタビューからうかがえた。

インタビューに応じてくれたＯ・Ｋさんは、口寄せは依頼者に望まれてやっているものであり、イタコは口寄せを通じて人を癒すという人助けをおこなっているとつくづく思うと話してくれた。同じく、イタコの癒しの力に注目し

た青森県立保健大学の研究チームは、イタコを訪れる依頼者に自殺者の遺族が多いことに気付き、「口寄せ」を遺族支援に役立てられないかという調査研究をおこなっている（朝日新聞　2010（平成22）年12月24日社会（14版））。

しかしながら、最近のニーズの高まりとは逆にイタコのなり手は減少し続け、八戸市では現在、70歳代の高齢のイタコ（O・M さん）のみが依頼に応える形となり、この先当該企画、およびイタコそのものの存続が危ぶまれることも明らかとなった。

今後は、どうしたらイタコの癒しの手法を継承していけるのか、イタコをはじめとする地元の人々を中心に、われわれの問題としても知恵を絞っていかなければならないだろう。

そのためにも、八戸市を中心にイタコに対するインタビューを実施し、それをもとにどのような方向性が考えられるのかをさらに探ってゆくことが、今後の課題となろう。

謝辞　本報告は、お忙しいなか大変丁寧にインタビューに応じてくださり、資料まで作成してくださった公益社団法人八戸観光コンベンション協会の O・K さんのご協力なしには完成できませんでした。ここに深く感謝いたします。

注

(1) 「駅でイタコに会える」［2010/06/17］COCORiLA ココリラ編集部
（http://www.cocorila.jp/article/articles.html?num=2010061701）
アクセス日：2011年10月30日
「八戸駅で「イタコの口寄せ」が人気」［2011/06/03］東奥日報
（http://www.toonippo.co.jp/news_too/nto2011/20110603110106.asp?fsn=eb33f76037153e93cde084f7e7644d6f）
アクセス日：2011年10月30日

(2) 恐山は862年、慈覚大師により開かれた霊場で、その入口には曹洞宗の恐山菩提寺がある。ここはもともと死者の帰る山として地元の人々に信仰されていたが、仏教的意味合いが加わり、火山ガスが噴出している一体を地獄、宇曾利湖を取り巻く浜を極楽になぞらえるようになった。恐山でイタコが口寄せをおこなうための市をたてたのはそれほど古くないこととされ、昭和のはじめとも第二次世界大戦の少し前ともいわれる（加藤　敬　2001「最後のイタコ―2001年「恐山」夏の大祭」『新潮』第45号2001年 9 月号　pp.193-194）。大祭ではイタコの口寄せを目的とした人が多く集まる。

(3) インタビューは八戸市三日町にある八戸ポータルミュージアム・「はっち」でおこなった。

(4) 青森では「イタコ」は別名「エダコ」「イジコ」「ゴミソ」、岩手や宮城では「オガミン」「オガミサマ」、秋田では「ミコ」「ミゴ」、福島では「ワカ」「アズサ」などとよばれるという（烏兎沼宏之　2000年「「オナカマ」考」『東北学』vol.2 pp.71-84））。ただし、研究者により様々な分類がなされている。例えば川村邦光は、同じ盲目の巫女でもイタコとは異なり口寄せ（ホトケ降ろし）をおこなわない「オガミサマ」や「カミサマ」などとよばれる巫女もいると述べている（川村邦光　2000年「“東北”近代の盲巫女―宮城県の巫女をめぐって」『東北学』vol.2 pp.62-70）。今回インタビューした八戸観光コンベンション協会の O・K さんも、「八戸ではイタコをカミサマとよび、『カミサマに会ってくる』などと言う。イタコもカミサマも、みなオシラサマという郷土の神（養蚕の神）を遊ばせることもやる。カミサマとイタコの区別は難しい。イタコの O・M さんに『〇〇さんはイタコですよね』と言うと、『あのひとはカミサマで違う』と言われたりする。」と述べていた。

(5) 目の不自由な女性の職業としては、以前はイタコの他に瞽女とよばれる三味線を弾き門付巡業をする旅芸人があった。

(6) 柳田国男　1968「巫女考」『定本　柳田国男全集 9 巻』pp.221-304 筑摩書房

(7) 本プロモーションの趣旨説明書には、「「美知の国あおもり」の「美」はパワースポットをはじめとする本県の「自然の美」であり、「知」はパワースポットや占いに求める「癒しの知」を意味します」とある。このように、青森県は今、「癒し」や「パワースポット」観光に力を注いでいるといえる。